

# T・イーグルトンのD・H・ロレンス解釈 己れの文化から逃げ出した男

吉村 宏一

はじめに

テリー・イーグルトンは、レイモンド・ウィリアムズ亡き後、イギリスのマルクス主義批評を支える第一人者として活躍している。1943年生まれの彼は、ランカシャーのサルフォード市の労働者階級の出身である。21歳の頃、彼は、カトリックの左派が出版している雑誌『スラント』に「政治とベネディクト派」というエッセイを発表し、ベネディクト派の儀式は教会の会衆を受け身の観衆に貶め、キリストの肉体を商品として取り扱っているが、そのようなやり方は正に資本主義的な手法を助長する共犯者としての働きをしていると、述べた。<sup>1</sup> もちろん、この若造の生意気な意見は厳しく反駁された。しかし、その後の彼の批評活動を見ると、その根底には急進的なカトリックとして社会的正義を求めて何物をも恐れずに立ち向かっていく、若々しい熱情が激しく渦巻いている。

イーグルトンの文学批評は幅広い。彼がロレンスについて書いている記述は、数量的にはそれほど多くなく彼の膨大な批評活動のなかでは周辺的なものであって、そのマルクス主義批評の中核を端的に示すものではないかもしれない。とはいえ、彼がロレンスを論じていることは確かであり、ロレンスという鏡によって彼の論の特質がなんらかの形で映し出されることも確かである。たとえ周辺の批評であれ、イーグルトンがロレンスという作家をどのように捉え、どのように位置づけているのかを見ることは、マルクス主義批評家として、これまで論じてきたコードウェルやウィリアムズとの相違点を見ることになり、<sup>2</sup> 対比的な形ではあるがイーグルトンの批評の姿勢の一端が明らかになるのではないかと思われる。

---

<sup>1</sup>「言語文化」2-1：21 - 43ページ 1999.  
同志社大学言語文化学会 ©吉村宏一

ウィリアムズはイギリスのルカーチと呼ばれたが、イーグルトンの場合は必ずしも、ヨーロッパの先達の名を冠して呼ばれることはない。彼の批評の特質は、『文学入門』でも明らかのように、20世紀のヨーロッパの多様な思想や文学理論を自家葉籠中のものにし、イギリス文学の領域を越えて実に幅広い視点から論じている点にある。ウィリアムズとの関連で言えば、イギリスの文学や文化をイギリスを中心に捉えるのか、あるいはヨーロッパの一つとして相対的に捉えるのか、その点が相違点であろう。自分たちの祖国をイーグルトンとウィリアムズがどのように捉えたのか。その興味深い相違点は、両者のロレンスの捉え方に実に明確に表れている。1960年代、イーグルトンは、まだ若年にもかかわらず、批評活動を開始し実に多様な仕事を精力的に押し進めていく。だがロレンスという一つの作家に絞って、彼の仕事を見てみると、ロレンスについていろんな書物で言及していることは確かなのだが、ロレンス一人に絞って論じているものは意外とすくない。具体的には、1970年に出版された『エグザイルとエミグレ』、1976年の『批評とイデオロギー』において、単一の章を設けて論じており、また1983年に出版され、こういった類いの書にしては珍しくよく売れた『文学入門』でフロイト主義との関連で論じているくらいである。1996年の『ポスト・モダニズムの幻影』でもロレンスを論じているが、そこでは、すでに若き日に論じた議論を、ポスト・モダニズム批判のコンテクストに基づいて繰り返しているにすぎない。『エグザイルとエミグレ』は最も早い時期の作品であって、それをもってイーグルトンのロレンス観を代表させるのは、イーグルトンのその後の発展をあまりにも軽視しすぎるとの批判があるかもしれない。しかしながら、ロレンスという固有の作家に対するイーグルトンの態度は、その後もほとんど変化していないように筆者には思われる。それ故、本論では、『エグザイルとエミグレ』において見られるイーグルトンのロレンスの捉え方を紹介し、狭い範囲での議論であるかもしれないが、イーグルトンの批評について考えてみたい。

#### 1 20世紀初頭のイギリス文学と亡命者たち

『エグザイルとエミグレ』の「序文」で、イーグルトンは、20世紀初頭の

イギリスの文学界で活躍したのは、イギリス人ではなく外国の出身者である点を指摘している。J. コンラッド、H. ジェイムズ、T. S. エリオット、E. パウンド、W. B. イエイツ、J. ジョイスそれとロレンスの7名の名を挙げ、ロレンス以外の6名はポーランド人、アメリカ人、アイルランド人であって、このようにイギリスの文学界が外国出身者によって支配されたという事実そのものには、20世紀初頭のイギリスの社会や文化の特質が実に明確に示されていると述べている。

19世紀の作家や詩人たちは、彼らが生きていた時代の社会と深く結びついており、社会を「全体としてまるごと」捉えていたと、断定的な口調で述べている。つまり、19世紀の作家や詩人たちは、リアリズムであれロマンティズムであれ、それぞれが依拠する表現の手法が異なっていたにしろ、彼らが生きていた社会や文化全体に対して共通の関心を抱いていたし、その文化を信じ、それに「忠誠」を誓っていた。作家や詩人たちは確かにそれぞれ党派派心があって、個々の事象や人間たちに対して批判や憤怒の思いに駆られていたかもしれないが、彼らは、イギリスという国そのものをどれほど鋭く批判していようと、イギリス文化なるものの存在を絶対的に信じており、批判と信頼とのバランスをうまくとることができたのである。

ところが、20世紀に入ってから、イギリスの作家や詩人たちはイギリス文化を全体的に捉えることができなくなってしまった。イーグルトンは、イギリス社会の階級がその原因ではないかと主張している。もっとも、彼は、従来からマルクス主義的な理論だと思われる「階級決定論」に、想像力豊かな文学を荒っぽくあてはめて解釈しようとしているのではないと弁解しながらも、20世紀初頭の作家たちを「上流階級」出身の者と「下層中産階級」出身の者とに分離して論を進めている。例えば、「上流階級」出身の作家として、E. M. フォスター、V. ウルフ、E. ウォーなど。「下層中産階級」出身の作家として、G. ギッシング、B. ショー、A. ベネット、H. G. ウェルズなどを挙げている。そして「上流階級」の特徴として、作家たちの関心は非常に狭い範囲に集中していることを指摘している。彼らは倫理や美学、形而上学的な問題、あるいは自分たち選り抜かれた上流階級の生活や価値観に強い関心を示しているが、他方自分たちが現実に生きている社会

とのかかわりや社会の組織問題などは置き去りにしたままである。「上流階級」の典型的なイデオロギーとして、イーグルトンはブルームズベリーのリベラリズムを挙げている。他方、「下層中産階級」出身の作家たちは社会の状況を描いているが、ナチュラリズムの美学哲学に基づいて、日常のありふれた平凡な「生」をあるがままに描き出そうとする。退屈するほどに綿密に、かつ冷厳に描き出すことに彼らは重点を置いた。彼らの関心は、科学、政治、社会組織に注がれ、その典型的なイデオロギーはフェイピアニズムであると、イーグルトンは説明している。このような違いはあっても、両者はともに当時の保守的な政治状況に強く縛られていて、自分たちの所属する階級の枠を越えてイギリス社会を全体として「まるごと」見ることができなくなってしまっていた。それぞれが、イギリスという小さな文明社会の枠内でしか通用しない価値観に決定的に囚われていたのである。

イギリスの作家たちが、それぞれの所属する階級の枠内に閉じこめられて仕事をしていたのに対して、まず、外国から来たH・ジェイムズやJ・コンラッドは、階級の枠の外側からイギリス社会を見、その文化を「まるごと」把握することができた。さらに彼らは自分の出身の国での多様な経験を付け加えることによって、自分の国とイギリスとの一種の緊張関係のうちにイギリス社会を描き出した。そしてそこには、階級を越えた「まるごと」のイギリス社会が提示されることになったのである。

こういった傾向は、ジェイムズたちよりも若い世代のT・S・エリオット、J・ジョイス、E・パウンド、W・B・イェイツにおいても見られる。彼らが活躍した時期は、第1次大戦を含む1910年代から20年代にかけてであった。世界大戦を経た後、彼らは、イギリス文明に対して、大戦前に活躍したジェイムズやコンラッドとは異なる態度をとることになる。エリオットたち、外国からの移住者たちは、以前は確固として存在していたイギリス社会が今は疲弊し、空洞化し、崩壊していく予感を明確に感じはじめている。ところが、イギリスの作家たちは、大戦を経ても相変わらず階級の枠内に閉じこもったままであって、自分たちの生きている土台であるイギリス社会が崩壊するなどといった思いに取りつかれることはなかったと、イーグルトンは主張している。このように主張するイーグルトンが、ロレンスをイギリス人であるに

もかわらず、こういった移住者や亡命者たちの一群に組み入れているのは、彼のロレンス解釈を理解する上で、注目すべき点であると思われる。ロレンス自身は、例えば1922年4月30日づけのレディ・シンシア・アスキス宛ての手紙でも明らかなように、自分がイギリス人であることを痛切に意識し、イギリス社会の墮落を嘆いている。しかし、イーグルトンは、ロレンスが個人的にどれほど自分のイングリッシュネスを意識していようと、それはそれほど重要な問題ではなかったのである。むしろロレンスは外国人と共通するところが多かったが故に、彼を外国人たちと同じ枠組みのなかに入れてしまったと、考えるべきであろう。ここにイーグルトンのロレンス解釈の大きな特質があるように、筆者には思われてならない。

ロレンスは労働者階級の出身であって、そのため当時のイギリス社会の支配階層であった下層中産階級や貴族階級の人々とは違った形で社会を捉えることができたと言えるだろう。しかしながらロレンスの初期の作品をめぐっての議論を見るかぎり、ロレンスが階級意識に強く囚われていたという議論は多いが、囚われていなかったという議論はほとんど見当たらない。例えば、処女作『白孔雀』では、労働者たちがほとんど登場せず中産階級らしき世界が描かれたのは、ロレンスが自分が労働者階級の出身であることを強く意識したが故に逆に作品から抹消する結果になったのだとこれまでよく語られてきたし、あるいは『息子と恋人』はイギリスで初めて労働者階級の世界を内部から描き出した傑作であるとする意見もよく知られているところである。こういった半ば一般的とも言える見解を当然知った上で、イーグルトンがロレンスを階級に囚われていない作家だとして、外国人たちと同じ枠組みのなかに入れていているのは、明らかに労働者階級に対するイーグルトンの特別な捉え方、あるいは思い入れがあったが故ではなかろうかと思わざるをえない。確かに、文化の面においては、当時のイギリス社会を実質的に支配していたのは下層中産階級であって、労働者階級は疎外され、なんら重要な役割を果たしていなかったとも言えなくはない。それ故、労働者階級は正に亡命者や移住者と似たような位置を占めるにすぎないと、イーグルトンは言いたかったのかもしれない。レイモンド・ウィリアムズの言う「周辺の存在」にすぎなかったと見なしていたのかもしれない。しかしながら、階級に囚わ

れないが故にイギリス社会を「まるごと」捉えることができた、亡命者たちをイーグルトンが高く評価していたコンテクストから考えると、労働者階級は社会の主流に組み込まれない単なる「周辺的な存在」などではなく、むしろ逆に労働者階級のみが当時のイギリス社会の階級の枠組みに囚われず、全ヨーロッパ的な視点からイギリス社会を見ることができた、労働者階級の働きを積極的に評価しようとしていたと理解したい。それ故イーグルトンは、ロレンスを外国人たちと同じように取り扱ったのである。

『エグザイルとエミグレ』の第7章「D. H. ロレンス」で、イーグルトンはロレンスをイギリス文明からの逃亡者であると述べている。他国から来たT. S. エリオットやW. B. イェイツがイギリス文明への移住者であり、他国の文明とイギリスの文明との間に生じる緊迫感のうちにイギリス社会を「まるごと」捉えて、その社会の全体像を描き出したのに対して、ロレンスはイギリス社会から逃げ出し、他国からイギリス社会の全体像を見、描き出した。当時のイギリス社会を「まるごと」捉える作業はイギリス社会の階級の枠から外れた者にしかできないという前提に立って、イーグルトンは「エグザイルとエミグレ」というカテゴリーを設定したと思われるが、イーグルトンのそういった設定は確かに当時のイギリスの文学の中心思潮がどこにあるかを的確に示す上で実に有効であったと言える。しかしながら、イギリス社会からの逃亡者と言っても、それは必ずしもロレンスただ一人が当てはまるわけではない。イーグルトンは、その点にもぬかりなく触れていて、G. オーウェルやG. グリーンなどもイギリス社会のなかにながら、ロレンスと同様、その社会からの逃亡者のような存在であったが、彼らはイギリス社会に対して徹底的な抵抗ができず、ただ無力感に苛まれていたにすぎなかったと、述べている。ところが、ロレンスについては、彼は、オーウェルたちと違って、自分を抑圧しようとする社会に戦いを挑み自分の道を切り開いていったと、イーグルトンはロレンスの闘争的な面を評価している。だが、ロレンスがなぜ闘争的であったのか、その点については特にイーグルトンは言及していない。イーグルトンがなぜ言及しなかったのかについては、もちろん推測の域を出ないが、ロレンスの個人的な資質も当然あったのだろうが、炭坑夫の倅としての出自が彼をオーウェルやグリーンよりも闘争的にしたと

判断した理由ではないかと思われる。インド総督府の官吏の子どもとして生まれイートン校で学んだオーウェルや、パブリック・スクールの校長の息子であったグリーンがどれほどイギリス社会を批判したにしても、その批判は、結局のところ、体制内からの批判にすぎず、中産階級の支配に断固抵抗し、体制そのものを根底から揺り動かす批判にはなりえなかったのである。

## 2 『息子と恋人』の解釈 労働者側に立つロレンス

イーグルトンはロレンスを強大な産業主義が支配する社会にあって徹底してその支配に抵抗した人物として評価している。彼は、ロレンスがイギリス社会から逃亡する以前の作品、特に『息子と恋人』を検討する場合も、産業主義社会が家族という小さな共同体のなかでいかに猛威をふるっていたかをロレンスは描き出したと解釈し、そこにイギリス社会を批判するロレンスの基本的な姿勢を読み取っている。イーグルトンは、ウォルター・モレルの「暴力」に産業社会の強大な力に翻弄される労働者の姿を見、またポール・モレルの錯誤に満ちた行動のなかにイギリス社会からの脱出を模索する試みを見出そうとしている。まずウォルターの「暴力」について次のように述べている。

ウォルターの「暴力」という形をとって、彼が仕えている専横的な社会の仕組みそのものが、そのまま家庭内で再現されている。つまり、炭坑夫である父が妻や子どもたちに対して持っていた関係を通して、若いロレンスは、仕事の世界が家族という共同社会に入り込みそれを崩壊させるのを明確に理解したのである。<sup>3</sup>

ロレンスは、『息子と恋人』において、ウォルターの働いている現場の状況や労働の苛酷さなどを特に描いていない。主として描かれているのは、炭坑夫の家庭の状況である。しかしイーグルトンは、一家の生活の糧を稼いでくる父親の家庭内でのあり方を通して、労働者の「疎外」された状況や苦闘が描き出されていると、解釈している。ウォルターも明らかに家族の一員なのである。その点をモレル夫人は明確に認識している。ウォルターは家族を支

える生活の糧を運んでくる男である。子どものポールが、父の世界を排除しようとして、その世界に住む人々が教養のない嫌な連中だと非難しようと、その世界は厳然と現実存在し、ポールたちの大切な家族を支えている決定的な基盤であることは否定できない。

家族という人間的な世界と炭坑という産業組織に組み込まれた労働者の世界とは、互いに分かれて相争う対立項である。『息子と恋人』では、ウォルターという人物を通して、この相争う対立項が家庭のなかに持ち込まれていることは事実であるが、ウォルターは必ずしも徹底した悪役としてパターン化して描かれているのではない。結果として彼は対立項としての役割を果たすことになるにしても、家族の一員としてかけがえのない存在である。『息子と恋人』においては、ウォルターも含めて家族が共同して行なう生活体験が描き出されている。ウォルターが一時的であれ子どもたちと楽しく過ごすことがあるが、それは産業と家庭のいわば融和を表わす場面であるとイーグルトンは捉えている。つまり、ウォルターが強制的な労働から解放された、労働者としての「本物」の自己が開花したとも言えるようである。

ウォルターは無責任ではあるが、保守的で古くからのしきたりをしつこく守ろうとする。頑迷とさえ言えるくらいである。この頑迷さは、動物のような愚かさではなく、むしろ外部からの支配を排除するために、イギリスの労働者たちが長期間かかって培ってきた伝統がその底に残っている習慣であると、イーグルトンは解説している。ウォルターは労働者として日々決まった生活の狭い枠のなかで生きている。彼には、仕事の後パブに出かけたり、休日に友達と遠出するくらい自由は与えられてはいるが、それ以上の自由は許されていない。結局、ウォルターは仕事にしる家庭にしる、「貧しさ」というものに圧倒的に支配されていて、中産階級の男たちが、仕事の領域を離れて、手にすることができる家族だけの私的な生活を営むことができない。つまり労働者には、「仕事」と「家族」を切り離すことができず、「家庭」のなかにも「仕事」の原理が入り込んでくる。家庭内でのくつろぎなども、ウォルターの仕事がうまくいっているかどうかにかかわってくる。ロレンス自身、ウォルターの「動物のごとき活力」に対する称賛の気持ちを持っていたことは確かである。だがそれだけでなく、労働者として「仕事」の原理を家



庭内に持ち込まざるをえないため、家族にくつろぎを与えることができない状況にあったウォルターに対して、ロレンスは深い共感を抱いていたと、イーグルトンは指摘している。この指摘は、ロレンスを単に生命の信奉者としてだけでなく、労働者たちの側に立つ者として位置づけているイーグルトンの評価を明確に示すものである。

このようにウォルターが「仕事」の世界で生き抜いていくためには、その世界の原理を家庭内に持ち込まざるをえず、結果として家族関係を破壊し、彼自身無責任な人間と評価されることになる。確かに、炭坑という産業組織がウォルターに要求するものは、きちんと責任を果たしうる人間としての資質ではなく、消耗品としての単なる肉体にすぎなかったのである。彼の無責任さは、近代産業主義が労働者を単なる大きな機械の部品と見なしそこに人間的な価値を全く認めなかった結果生じた特質であり、必ずしも責められるべきものではないと、イーグルトンは主張していると思われる。

労働者として生きるウォルターを通して明らかになってくるものは、狭い領域に固執しそこで変化なく生きる「固定性」である。彼の生きる世界は、他の視点、例えば、モレル夫人のような中産階級の視点からすれば、実に偏狭に見える。だがウォルター自身は労働者階級が培ってきた文化を全面的に信頼し、日々生きているのである。イーグルトンは、ウォルターを労働者階級の文化に疑問を抱かずに生きている人物として捉え、これまでモレル夫人やパールの視点から批判的に評価されてきたウォルターを擁護し、労働者としてのウォルターのあり方を積極的に評価し紙面の多くを割いている。もちろん、イーグルトンはモレル夫人についても、彼女はウォルターの「固定性」の枠内に閉じこめられながらも、その世界を越え別の階級へ移行しようとする衝動を表わす人物ではあるが、結局その世界に留まりつづけると、コメントしている。

イーグルトンは、『息子と恋人』は、自分自身の文化に関連して人々がどのようにかかわっているのかという問題に対して、ロレンスが初めて取り組んだ作品である』と、要約風に語っている。このように彼が語るのは、労働者階級には固有の文化があり、中産階級にはこれまた固有の文化があるという認識があるからである。『息子と恋人』においては、労働者階級の生活が

実に生き生きと体感しうる現実として描き出されており、労働者階級の文化も強い説得力をもって写し出されているが、その文化を全面的に支持する人物が設定されていないと、イーグルトンは述べている。それは、ロレンスの自画像とも言えるポールが、父ウォルターのごとく、労働者階級の文化を受け入れ、そのなかで生きようとしなからであろう。ポールは、母の信じる中産階級の文化を高く評価し、労働者階級の文化から逃れようとする気持ちを持ちながらも、他方労働者階級の家庭にしっかりと根ざして生きていくことの大切さをどうしても否定できない。また、自分が家族を捨てれば、結局、根なし草として落ち着かない状態に陥ってしまうことがよく分かっている。このように、ポールは自分の所属する階級の文化にがっちりと掴まれ身動きできない状況に追い込まれてしまっている。もちろん、頭ではそういった状況から脱出すべきだと分かっている、それを具体的に現実化し行動しえない人物なのである。こういった矛盾に悩む人物を設定せざるをえなかったのは、作者ロレンスが自分の出身階級に対して否定しながらも肯定せざるをえないといった矛盾に苛まれていたからであろう。確かにロレンスは、『息子と恋人』を執筆していた時点では、自分の属していた労働者階級を強く意識していたと、イーグルトンは指摘しているが、しかしこの指摘は、当時のイギリスの作家たちがそれぞれの所属していた階級の枠に囚われていたのと同様、ロレンスも階級意識の枠にまだ囚われていたことを認めることになり、先に、階級の枠を超えてイギリス社会を「まるごと」捉えた作家として位置づけようとしていたイーグルトン自身の説と矛盾することとなる。ところが、イーグルトンは巧みに伏線を張っていて、ロレンスを全面的に労働者側に立たせていない。労働者ウォルターについての説明によってロレンスが労働者たちに深い共感を持っていたと、イーグルトンは指摘しながら、同時にポールを通して労働者階級からの脱出をはかろうとする試みを強調しており、ロレンスの労働者に対する共感が必ずしも全面的な共感ではなく、いわば一半の共感であり、ロレンスが当時労働者階級を強く意識してはいたが、必ずしもそれに囚われていないことを示唆しているのである。

イーグルトンは、ポールを通して、ロレンス自身が実際に労働者階級の枠組みからの脱出を果たしたと、捉えている。ポールは労働者の家庭という小

さな世界に生きてはいたが、絶えず労働者階級と中産階級との葛藤を、父と母との葛藤のなかに見て意識していた。彼は労働者階級に留まり、炭坑夫として父のあとを嗣いで生きていくのか、あるいは兄ウィリアムズのごとく労働者階級を脱出し中産階級の世界に入り、そこで産業戦士として競争に参加するのか、その二つの選択のうちいずれかを選ぶ以外にないのである。しかしポールは、ウィリアムズのごとく、中産階級への階段を上ろうとはしない。そうかと言って、炭坑夫になろうともしない。ポールは二つの選択肢の間で絶えず揺れ動いているというのが、イーグルトンの捉え方である。彼は、別の言い方で、ある文化に没入しようとする志向とその文化から脱出しようとする志向とが、『息子と恋人』のリズムになっているとも述べている。こういった没入と脱出の志向を繰り返そうとすれば、作者自身がいずれかの階級の文化に囚われているわけにはいかない。それぞれの文化から一定の距離を置いて、それらを客観化して捉え、それらに対処しないかぎり、こういった没入と脱出への志向を繰り返すことはできない。このようにポールの没入と脱出の繰り返しの重要性を指摘することによって、イーグルトンは、作者自身がいずれの階級にも自分が入れないと明確に認識していたことを示唆し、『息子と恋人』の段階でも、ロレンスがすでに階級の枠を外れエグザイルへの道へと進みはじめたことを示したと主張しているのである。そうだとすれば、イーグルトンは『息子と恋人』に関して労働者階級へのロレンスの強い共感を強調しながらも、基本的には『息子と恋人』でもすでに階級の枠を超えた視点から「まるごと」イギリス社会が描き出されていると捉えた上で議論を展開していたと理解されるべきなのであろう。

### 3 『虹』 階級社会の「総体化」の偉業

『虹』についてのイーグルトンの評価は、ウィリアムズの評価とかなり異なる。ウィリアムズは『息子と恋人』のほうを高く評価したが、イーグルトンの評価は逆である。イーグルトンが『虹』を『息子と恋人』よりも高く評価しているのは、確かである。しかし、かと言って、必ずしも長く論じているわけではない。彼は、『虹』においても、ブラングウェン家の人々が過去から受け継いできた古い文化にこだわり、その内にどっぷり浸かって生きつ

づげようとする動きと、その文化を越えて進もうとする動きに注目して、論を進めている。トム・ブランゲンが外側の世界に強く惹かれながらも、自分の育ってきた世界を捨て切れず、両者の狭間のなかでいずれとも決断できずにいる状況は、『息子と恋人』のポールが置かれていた状況の再現であるとも言える。しかしトムの場合は、リディアという自分とは全く異質な外界から来た女性との関係を築くだけでなく、同時にマーシュ農場の土地に深く結びついて生きることによって、内なる世界と外なる世界とのバランスをうまくとって生きることができた。ところが、次の世代となると、マーシュ農場の世界は孤立化し、その世界のなかだけで充足して生きていく傾向が強くなり、それを取り巻くいわゆる社会とのかかわりは疎遠となり、社会は単なる外界と化してしまい、アーシュラにいたっては、機械化され、生命を失った市民社会などなら価値がないと否定することになる。

この生命の源のごときマーシュ農場にその根をはり、外界の世界を否定するアーシュラの言動は、ポールやトムが古い文化の枠を越えて別の世界へ移行しようと試みた場合とは、異なった次元の話であると、イーグルトンは解釈している。特にアーシュラの教員としての体験やスクレベンスキーやウィニフレッド・インガーとの体験を通して、『息子と恋人』では全体的には捉えられなかった「社会的感情の構造」とでも言えるものが描き出されており、それぞれの話が融合された一個の文化の総体を表わしている。つまり、20世紀初頭の、労働者の世界をも含んだ、中産階級の世界を全体として表わすことになったのである。イーグルトンは、「ある種の」という条件を付けながらも、「総体化」が達成されたと評価している。ここでイーグルトンが「総体化」を一つの価値基準として重視しているが、そこには、ルカーチが尊重した「反映理論」(reflect theory)の影響が見られるようにも思われる。<sup>5</sup> しかしながら、ルカーチの理論ではリアリズム小説は、社会の歴史的なリアリティを写し出す「歴史的な総体化」という形をとって、社会の構造や意味を提示しており、その「総体化」が小説を評価する際に重要な基準となっている。イーグルトンも「総体化」という概念を用いており、そこに古いマルクス主義批評の影響が読み取れるが、彼は、リアリズム小説の「総体化」を主たる問題としているのではなく、階級の「総体化」、さらに個と社会の「総

体化」が達成された点を高く評価しているのである。

イーグルトンは、『息子と恋人』の段階では、「総体化」は達成されず、『虹』の段階に至って達成されたと、主張している。ロレンスは、個人が生きる固有の世界の特殊性を十分に描き切った上で、「総体」としての社会を提示することに成功したのである。個人と社会とのかかわりを対比するだけでなく、そのかかわりを持続するものとして描き出した。もっとも、ロレンスは19世紀のヴァイタリズムや理想主義から受け継いだいろいろな思想の影響を蒙っていて、社会こそ「生の力を失い、偽りで」とあるとする固定的な考えに支配される傾向がなきにしもあらずだが、『虹』の場合、そういった固定的な考えに支配されておらず、正に「偉業」である。

その一例として、イーグルトンは、アーシュラとスクレベンスキーが散歩している途中、住居を兼ねた平型の屋形船を見かけ、そこに住む男とアーシュラが話をし、女の赤ちゃんにネックレスを与える場面を取り上げている。この労働者の一家に対してアーシュラのとる態度は中産階級の人がとる態度であり、『息子と恋人』でのリリーがモレル家の人たちに対してとる態度と共通するところがある。『息子と恋人』に比べて、確かに細かい状況は描かれていないが、アーシュラの打ち解けた率直さが生き生きと描かれていて、そのためにスクレベンスキーの硬直したよそよそしさが突にくっきりと露呈される。船に住む男はアーシュラの率直さを受けとめ、両者の間に階級の違いを越えた共通の認識が生まれるのである。このようにイーグルトンは労働者階級と中産階級との間の階級を越えた共通の認識の成立を重視している。

さらに彼は、『虹』の最終場面での虹のヴィジョンの描写を、「直接的で、この上なく明白な『総体化』」の例として取り上げている。

炭坑夫たちは生きながら埋められているような汚い炭坑街に住んでいる。無秩序にあちこちに小山の上にまで広がった小路や住宅。正に「腐敗」がすべてを圧倒し勝利をおさめているかのようなのである。しかしその炭坑街の上に虹がかかる。具体的な町、ベルドーヴァーやレズリーといった町に「腐敗」が侵食し広まっていく。この町の「腐敗」のヴィジョンは、その町に生きてきたアーシュラの視点から、イーグルトンの解釈によると、よく知っている一つの文化が全体的に、総合的に詳細に描き出されている。その上に、虹の

イメージが加わるが、そのイメージは地上に広がる汚い街並みが作り出すヴィジョンの上に、時間的、空間的に広がる別個の雄大なヴィジョンを付け加える働きをしている。『虹』では、各世代の人物たちが己れの属する社会や文化に没入しそれを固守しようとする動きと、次の世代においては前の世代の文化に対して反発し新たな方向を探る動きが繰り返されてきた。今、アーシュラが眼前に見る汚い街並みのヴィジョンは20世紀初頭の時点でイギリスの文化が到達した状況を総合的に表わすヴィジョンにすぎない。このヴィジョンも、これまで作中で描かれてきた「没入」と「反発」のリズムによって捉えられるべきだと、イーグルトンはみなしている。ロレンスはそこに虹のヴィジョンを重ねあわせており、それによって現代文明が厳しく拒否されはするが、それでもなお、そこに生きる人々の活力を期待し眼下に広がる現代の社会は再度作り替えられるべきだとするアポカリプティックな作者の視点が浮かび上がってくると、イーグルトンは解釈する。小説内で繰り返された「没入」と「反発」のリズムが正に死と再生のイメージで総合的に纏められているのである。

イーグルトンが『虹』を高く評価しているのは、この作品では幅広く19世紀から20世紀にかけてのイギリスの文化が階級の枠を越えて総合的に描き出されていると判断しているからである。ここで気になるのは、ウィリアムズの『虹』の評価である。ウィリアムズは、アーシュラを通して描かれた自己成就への徹底した試みが『息子と恋人』に見られた「有機体的な共同体」を打ち壊す働きをしたとして、『虹』を高く評価しなかったが、その点についてイーグルトンはほとんど問題としていないようである。彼は、ロレンスの特質を、労働者階級出身のプロレタリアート作家として労働者の文化や世界を生き生きと描き出したところにのみ求めるのではなく、労働者階級と中産階級との狭間にあって自分の所属する階級社会への「没入」と「反発」を3世代にわたって描き出し、イギリスの文化や社会を包括的に集約して描き上げたところに見出そうとしている。言い換えると、ウィリアムズはいわばロレンスを労働者階級の枠内に閉じこめ、その階級の特質と美点を表わすものとして彼の価値を見出したのに対して、イーグルトンは、ウィリアムズの評価を踏まえながらも、ロレンスが労働者階級の枠を飛び出し、他の階級の

世界を労働者階級の世界に積み重ね、複眼的、包括的にイギリスの文化や社会を描き、その意味を20世紀という時代の動きのなかで捉えようとした点を評価したと言える。

#### 4 『恋する女たち』 抽象的な語りの堆積物

イーグルトンは、イギリスを舞台にして描かれた『恋する女たち』と『チャタレー卿夫人の恋人』について論じている。ウィリアムズの場合も、第1次大戦後にロレンスが書いた『アロンの杖』以降『羽鱗の蛇』までの作品を取り上げておらず、イーグルトンもこの『エグザイルとエミグレ』の時点では特に説明せず、ウィリアムズと同じ選択をしている。マルクス主義的な批評家がロレンスのファシスト的な傾向の強い作品を取り上げていないのは、単に舞台設定がイギリスでないという理由だけではない、何か別の理由があるように思われる。この点については稿を改めて論じる必要があり、ここでは特に触れない。

ここでは『恋する女たち』についてのイーグルトンの解釈を見てみたい。彼は『虹』と『恋する女たち』の間には大きな違いがあることを指摘している。それは社会に対する人物たちのかかわり方である。作品中現代社会に生きる人々に対する批判はパーキンを中心に行なわれており、例えばその批判は、「人類などできるだけ早く消え去ってしまったほうがいい」という彼の言葉に集約的に見られるが、ここで言及されている人間は、個別の人間ではなく、自分とは距離を置いた外的な存在として捉えられていて、実に抽象的に語られている。イーグルトンはその点が『虹』と『恋する女たち』との大きな違いだと指摘している。また、パーキンは、イギリス社会についても、われわれがそれを「愛しているにしても、それはひどい病気に罹っていて、もはや何の希望も持てない老親に対して感じるような愛」を抱いているにすぎないと述べているが、そこではイギリスに対する「没入」と「反発」とが複雑な形で表わされていることは確かである。だがこの場合も、『虹』と違って、退屈な中産階級の知識人が、具体的な社会の現実から切り離されて、ただただ無為に、議論のための議論をしているだけのことであり、イーグルトンは厳しくコメントしている。さらに彼は、グドランがベルドーヴ

アの炭坑夫たちに感じる魅力と嫌悪感について述べている。グドランは、炭坑夫たちの労働者としての重々しさや男臭さを感じているが、彼らに対して人間としての実在感を感じていない。つまり自分を取り巻く一つの雰囲気として捉えており、炭坑夫たちの世界は全く抽象的な「別個の世界」と化してしまっている。イーグルトンは、『息子と恋人』や『虹』では労働者たちの世界と登場人物たちの意識とが反応し合いそこには何の断絶もなかったが、『恋する女たち』においては、両者の間に「越えがたい分水嶺」があると評している。労働者たちと登場人物たちとの断絶を強調するために、彼は、パーキンとアーシュラが若い労働者に椅子を与える場面を具体的に紹介し、その若い労働者と『虹』においてアーシュラがネックレスを与えた屋形船に住む男とを比較している。『恋する女たち』で椅子をもらう労働者は、屋形船の男が持っていた一個の人間としての威厳を失い、単なる動物に似た存在として描かれているにすぎない。つまり、『恋する女たち』では個人の感情が異様なまでに拡大されて表わされており、その結果、それは一般社会における「客観的相関物」として具象化されていないと、イーグルトンは批判している。

確かに、『恋する女たち』において、ロレンスはある文化全体に流れる感情の型を顕在化させようとしている。しかしながら、現実の社会は別個の存在として切り捨てられてしまうような形で表わされており、『恋する女たち』が本当に偉大な傑作と言えるかどうかは疑問であると、イーグルトンは述べている。そして、その点で『恋する女たち』は『息子と恋人』と『虹』に比べて決定的に劣っていると評している。これは何も「シンボリズム」対「社会主義リアリズム」といった風に対立させていづれが正しいといったような形で問題にしているのではないとも、彼は主張している。『恋する女たち』では、人間はまるで真空状態のなかで動き回っているようであると手厳しく批判し、またそこで描かれる社会についても、実に多く語られはするが、具象的な形で提示されず、結局、単なる抽象的な語りで終わっていて、「失われた世代」の自意識過剰の哲学が唱えられているにすぎないと、述べている。

このように、イーグルトンは『恋する女たち』を観念的で、具体性のない抽象的な語りの集積物にすぎないと批判し、そこでのロレンスの試みの意味



をさらに問い詰めていく。イーグルトンは、パーキンがアーシュラに向かって自分は目に見える女ではなく、見えない女が欲しいと語る箇所と取り上げ、こういったパーキンの発言には、ロレンスが『虹』で行なった社会への「没入」とそこからの「反発」のパターンの展開が完全に行き詰まってしまったことが示されていると、述べている。ロレンスは、幼少の頃に労働者階級のなかで生きた体験から、一個の人間としての成就是他者とのかかわりのうちに達成されるものだと信じてきた。ところが、彼が本来の自己を確立しようとする、その他者とのかかわりは自己の成就是を阻害する大きな脅威と化したのである。パーキンの「見えない女」を求めようとする試みは「かかわり」を超えた「かかわり」を求めようとする試みである。だが、彼は「かかわり」を求めながらも具体的に見える「かかわり」を排除せざるをえないパラドックスに陥ってしまったと言えるのである。本来の自己は、現実に見える女との「かかわり」においては確立しえないと、パーキンは信じている。それならば「かかわり」など無視すればいいのだが、パーキンにはそれが出来ずやむをえず「見えない女」との「かかわり」というパラドキシカルなことを主張せざるをえないことになってしまう。イーグルトンは、こういったロレンスの主張のうちに、彼がいかに「かかわり」にこだわっていたかを見ようとしている。そして、ロレンスがあくまで「かかわり」にこだわったのは、結局、彼自身が労働者たちの古い共同体社会の領域を捨てたにもかかわらず、それでもその社会との「かかわり」を諦めることが出来ず、それに代わる何かを探ろう試みたからだ、イーグルトンは解釈している。彼は、一旦境界を超えて歩み去った者はどこにも行くところがないと繰り返し主張し、ロレンスの悲劇は、彼は境界を踏み越えたが自分の依拠すべき場所が見つからなかったところにあったのだと、強調している。

人間は自分の所属する階級や文化を一旦捨てると、もはや以前のところに戻ることは出来ない、イーグルトンは堅く信じて、このような主張をしていることは明らかである。だが、かといって、彼は自分の所属する階級や文化にあくまでこだわりその閉鎖的な状況のなかで生きることが最高だと主張しているわけでもない。むしろ、ベネットやウェルズなどは特定の階級にこだわったが故にイギリスの文化全体を捉えることが出来なかったと、ベネット

たちを批判している。イギリスの社会にあっては、労働者階級の世界から外に出た者はほとんど中産階級へと入っていき、その階級世界の文化や価値に依拠して生きていった。ところがロレンスは労働者階級の世界から外に出はしたが、中産階級の世界に入りその文化や価値を全面的に評価しそれに依拠して生きることが出来なかった。それは、階級社会であるイギリスの社会に実質的に入ることが出来なかったことを意味する。それ故、彼はイギリス社会から放逐されるような形で国外を彷徨い歩き、一種の国外追放者のごとき生涯を送った。こういった母国から切り離されて生きざるをえなかった作家たちには、本論の「はじめに」のところでも述べたように、エリオットやパウンドなど外国生まれのイギリス在留の作家たちがいるが、彼らが現実の社会や階級などを超越し芸術の価値に重きを置く唯美主義に逃げ込んだのに対して、ロレンスはそこにも逃げ込もうとしなかった点が彼の大きな特徴であり、他のエグザイルの作家たちと異なるところだと、イーグルトンは指摘している。彼はそれをロレンスの悲劇だと言う。そしてその悲劇的な特質の故にロレンスを高く評価する。彼ほどに徹底してイギリス社会を全面的に批判した作家はほとんどいないし、また彼ほどにイギリス社会の内部を理解していた作家もほとんどいなかったと、イーグルトンのロレンスの評価は高い。

\*                     \*                     \*                     \*

イーグルトンは、このように階級の狭間にありながらも、一種の国外追放者としてロレンスがイギリス文化を「まるごと」捉えた点を評価している。しかしながら、イーグルトンが具体的に取り上げている作品を見ると、それらは、ロレンスが大战前から大战中にかけて、主としてイギリス国内において執筆した作品であって、大战後、現実にロレンスが国外追放者のごとく世界のあちこちを彷徨い歩いた時期に執筆された『アロンの杖』以降の作品は含まれていない。実に単純な見方かもしれないが、もしもイーグルトンが『アロンの杖』や『カンガルー』あるいは『羽鱗の蛇』などの作品を取り上げて検討していれば、国外追放者としてのロレンスがエグザイルとしての視点からイギリスをどのように見ていたのかが、かなり明らかになったのでは

ないかと思われる。

それにしてもイーグルトンはなぜリーダーシップ期のロレンスの作品を取り上げていないのだろうか。以下、『エグザイルとエミグレ』が執筆された1960年代の状況を勘案して考えてみると、その理由の一つとして、まずリーダーシップ期の作品を取り上げようとするれば、ロレンスのファシズム的な傾向をどのような形で労働者階級の味方としてのロレンスと適合させるかという問題と直面せざるをえなかった点が挙げられる。彼のファシズム的傾向については、過去のマルクス主義批評家たちが徹底して批判した問題である。それだけに簡単には解答が出てこないとも言える。1960年代後半、イーグルトンがリーダーシップ期の作品を避けたのは、結局、明快な解答が見えなかったためではないかと推測している。あるいは、多くの批評家がこの時期の作品は芸術的価値が低いため取り上げる必要がないと判断してコメントしていないケースも多く、イーグルトンも同じような判断をして、この時期の作品を取り上げなかったとも考えられる。あるいはまた、リーダーシップ期の作品には、イギリスそのものを舞台にしてイギリス文化が説得力をもって描かれていないと判断し、あえて取り上げる必要もないと考えたとも言えるかもしれない。さらに言えば、1960年代当時、「生の預言者」として、あるいは「労働者の味方」として評価の高かったロレンスに対してリーダーシップ期のファシスト的な傾向への批判を展開するだけの論理的基盤が確立していなかったとも言えるかもしれない。というのは6年後に出版された『文学とイデオロギー』ではリーダーシップ期の作品を少しではあるが取り上げ、一定の位置づけを行なっているからである。

いずれにしろ、『アロンの杖』や『堕ちた女』などでも、イギリス社会のある面がかなり辛辣なタッチで描かれていることは確かであり、なぜその点についてイーグルトンが触れていないのかは疑問として残るが、そこで描かれたイギリス社会はイーグルトンがロレンスに求める社会像とは一致しなかったためであると考え以外にないようである。しかしながら、基本的にはマルクス主義に依拠するイーグルトンにとっては、特にリーダーシップ期の作品に見られる新しい社会を模索するロレンスのユートピア的な思想は検討するに値しないものであり、それ故国外追放とも言えるエグザイルの状況下

で企てたロレンスの模索を無視せざるをえなかったというのが、真の理由ではないかと思われる。とりわけ、エグザイルというロレンスの特質を端的に示すテーマを取り上げながら、もしイーグルトンがマルクス主義という固定観念によってリーダーシップ期のロレンスの作品を無視したとすれば、イーグルトン自身、ロレンスの言う「観念の罨」に陥ってしまったという気がしてならないのである。

## 注

- 1 S. Regan (ed.), "Preface," *The Eagleton Reader* (Oxford: Blackwell, 1998), p. vii.
- 2 次の拙稿を参照されたい。「D・H・ロレンスとマルクス主義批評 C・コードウェルの場合」、『同志社大学英語英文学研究』68号（同志社大学人文学会、1997）pp.193-218。「D・H・ロレンスとマルクス主義批評 レイモンド・ウィリアムズの場合」、『同志社大学英語英文学研究』70号（同志社大学人文学会、1998）、pp.78-110.
- 3 T. Eagleton, *Exiles and Emigrés: Studies in Modern Literature* (London: Chatto and Windus, 1970), p. 192.
- 4 *Ibid.*, p. 198.
- 5 例えば、G・ホールダネスは次のように説明している。“In order to provide the individual characters with a social life which is always a dimension of their real life, the realist novel contains or alludes to a social totality which contains the characters as the novel contains them. The structure of the novel is an analogue of the structural totality of the society. . . . Provided that the novel embraces or alludes to sufficient social detail to ‘signify’ a society, then its totality can be termed realist. Obviously this theoretical definition invokes a theory of literature as ‘reflection’: that it reflects or imitates a historical reality outside itself. Reflection theory can often be quite useless as a means of theorising works of art, but suitably modified, it can be applied to the realist novel.”G. Holderness, *D. H. Lawrence: History, Ideology and Fiction* (Dublin: Gill and Macmillan, 1982), pp. 8-9.
- 6 T. Eagleton, *Exiles and Emigrés*, p. 207.
- 7 R. Williams, *The English Novel from Dickens to Lawrence* (London: Chatto and Windus, 1970), p. 178.

## Terry Eagleton's Interpretation of D. H. Lawrence: "An Exile from His Own Culture"

Hirokazu YOSHIMURA

Key words: class, exile, Marxist criticism

Speculative arguments based on literary theories have been fashionable recently in the studies of modern English literature. Many students and scholars appear to be eager to apply living works of literature to their theoretical standards. Materials found in literature, such theorists insist, are so multifarious and substantial that they are very useful for the purpose of materializing the cultural reality of a society according to a theory. Some scholars curtly reject such theories, believing that the theorists use literary materials to prove logically their own legitimacy yet fail in their efforts to verify the literary reality. Yet I think the importance of such theoretical criticisms may well be recognized. Any critical activity in literary studies would not be developed without rational arguments except the case of the impressionistic criticism resulting from a critic's personal taste. However, so many theories have been advocated and publicized, and the existing circumstances appear to be so complicated that most of us probably cannot judge how matters stand now. Certainly we know such special terms as Marxism, Feminism, deconstructionism, post-structuralism, etc., but, in reality, most of us do not exactly realize what they really mean historically. These 'isms' have their own reputable origins and histories, and what is more complicated, they have been profoundly influenced by each other. Now is the time for a re-examination of such theoretical approaches.

Marxist criticism has produced prominent literary critics, who, though they fundamentally accede to Marxist way of thinking, do not always maintain the same point of view since they have been so much influenced by the spirit of the times. Their interpretations of a writer would make us recognize their common conviction and their individual features.

Terry Eagleton is one of the most prominent Marxist critics. He has published numerous books to present the Marxist literary criticism of the last quarter of the twentieth century. This paper is a commentary-like article on his interpretation of D. H. Lawrence in *Exiles and Emigrées* (1970). Here is a brief summary of his interpretation of Lawrence, which revolves around the following three points.

First, Eagleton describes the dominant trait of the English literature of the early twentieth century by discussing seven writers: Joseph Conrad, Henry James, T. S. Eliot, Ezra Pound, W. B. Yeats, James Joyce and D. H. Lawrence. These writers dominated modern English literature, but all of them except D. H. Lawrence were non-English. Focusing on question of social class, Eagleton points out that one reason why such non-English writers and D. H. Lawrence succeeded in creating 'the great art of English literature' is a negative one: that is, indigenous English writers, caught within the limits of classes of English society, could not 'totalize' the significant trends of English culture. Expatriates and D. H. Lawrence were able to grasp English society 'as a totality,' because they were beyond the limits of the British social class system. Why is D. H. Lawrence, though he himself emphasized he was an Englishman, classified among the same group of expatriates? Eagleton's classification of Lawrence seems to imply subtly his Marxist interpretation favourable to working class. He criticizes the narrowness and partiality of the English indigenous writers who were from middle and upper classes, while he seems not to criticize working-class writers at all. One explanation for this may be that Eagleton himself comes from the working class.

Secondly, his interpretations of *Sons and Lovers* and *The Rainbow* are very different from those of Raymond Williams. Williams sets great value on *Sons and Lovers*, whereas Eagleton evaluates *The Rainbow* as ‘the highest point’ of Lawrence’s ‘literary achievement’ because ‘he exploited that relation of conflict with his own culture to create one of the greatest novels of the century, discovering with admirable certainty, the balance-point at which the old world he had known could be both inhabited from within and grasped, as a totality, from without.’ Williams attaches greater importance to the ‘organic community’ of English working-class society than to the cultural conflict between an individual and a society, or between the social classes, while Eagleton places high value on the ‘totality’ created apocalyptically from the cultural conflict between the classes in the English society.

Thirdly, Eagleton definitely states that Lawrence, who wandered around the world, was ‘an exile from his own culture.’ One might expect, therefore, that Eagleton would take up Lawrence’s literary works produced during his ‘rootless, frustrated wanderings.’ Eagleton, however, takes no account of such novels as *Aaron’s Rod*, *Kangaroo* and *The Plumed Serpent*. His almost total neglect of such novels is striking, since Lawrence in exile was able to illuminate the issues of the English society much more straightforwardly. Probably Eagleton did so with some reason. But that does not settle my doubts, though I suppose Eagleton pays no attention to Lawrence’s writings during his ‘leadership’ period partly because they are occasionally considered to be not worthy mentioning as art-works, or partly because they would show a marked trend toward Fascism or phallogentrism as certain critics have insisted.